



## 精密機器メーカーから

## 介助犬訓練所

柳本忠二さん(70) 下

# 会社育て上げ最後の犬仕事



関東地方に精密機器メーカーの事業所を立ち上げた40代前半一埼玉県内

5年前にNPO法人「近畿介助犬訓練所」を設立した柳本忠二さん(70)は奈良市が、犬と最初にふれあったのは、和歌山県で過ごした幼少期のことだ。

拾った子犬を近所の材木置き場に隠し、食べ残したおかずを与えた。数日後、母親にバレた。戦後の混乱期で、家は貧しかった。捨てるよう言われ、河原

で泣く泣く別れた。「あの犬、どうなったのかな」。幼心に刻まれたトラウマが、犬への愛情を深めた。両親の離婚をきっかけに13歳で大阪へ家出する。縁あって転がり込んだ八百屋で、2年ほど住み込みで働いた。ほどなく、お菓子や菓子の紙箱をつくるのに使われ、様々な形に切り出すのに必要な抜き型を製造する仕事に出会った。

仏間の欄間をつくる技術を生かせると知ると、東京・浅草の仏壇屋に頼み込

み、半年ほど修業した。独立したのは東京五輪があった1964年、19歳のときだ。「競合相手がいなかった。時代に恵まれた」。きめ細かく大量につくれるレーザー加工機をいち早く導入して成長した。

現在スタッフは1人。毎年数人、専門学校の卒業生らを住み込みで受け入れている。だが、ふんの処理や犬舎のそうじ、歯や耳の手入れなど、「犬好き」だけでは務まらない。長続きせず若者も少なくない。課題もあるが、高齢化社会には介助犬が必要だとの確信は揺るがない。「あと15年は頑張ります」。人生最後の犬仕事、と思い定めている。

最盛期は8社、250人近い従業員を抱えるグループを育てた。9年前、天皇、皇后両陛下が工場を視察に訪れた。がむしやらに働いてきた人生を認めてもらえた気がした。余生は介助犬の育成に捧げる。温めていたプランに踏ん切りがついた。

育てた犬を訓練するので

(佐藤秀男)